
クラスメイドッ！～ドSメイドとイヌ耳生えた俺。～

霧島美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラスメイドツ！〜ドSメイドとイヌ耳生えた俺。〜

【Nコード】

N75930

【作者名】

霧島美月

【あらすじ】

俺「そんなあらすじで大丈夫か？」メイド「大丈夫だ、問題ない」

俺のクラスメイドにしてメイド、麻素戸レイさんは蹴った人をドMに変える超能力の持ち主だった！

……ある日、俺が家に帰ったらレイさんが布団で寝ていました。そして、レイさんはなんと宇宙人だと名乗るのです！

俺の日常は銀河の果てまで吹き飛ばされました。めでたしめでたし

……orz

作者の美麗(?) カラーイラストの冴える、ドタバタ学園バトル &
ラブコメディ、スタート!

第1話 家に帰ったらメイドさんが寝てました。

> i 1 3 7 8 4 — 1 2 0 6 <

「何だ……これ……」

俺、佐渡主人さつりょうじんは、確か学校を終えて家に帰って来たはずなんだが、何だこの状況。

家の鍵が開いている。これはまだ良い。いや、冷静に考えてみれば全然良く無いんだが。

……問題は次だ。

俺のベッドで女の子が寝ている。しかもニーソックスやら服やらを脱ぎ散らかして、そりゃもう仕事を終えてくつろぐOLさん並みのご様子である。髪が青いのでコスプレ女と見た。

もしかしたら強盗って可能性もあるので、一応ケータイを握り締めて聞いてみる。

「あの〜、どちら様？」

「むにゃむにゃ、……死ね」

「し、死ねっ!？」

「むにゃ……。そうだ死ね、死んでしまえ! 有吉 行に毒舌を吐かれすぎて死んでしまえっ!」

……あれ、こいつすっごくムカつくぞ　コイツは普通に犯罪者
って扱いで良いかな？　良いよね。

刑法130条、住居（不法）侵入罪でタイーホだ。

「おいつ、人の家で何してんだ！　警察呼ぶぞ」

「うーん……アタシは宇宙人なんだから、警察なんて呼んでも無駄
だぞコラー（棒読み）」

「こっのやつろっ！」

頭にきた俺が、ガバツと布団を剥ぎ取ると、不意にその娘と目が
合った。

……え？　起きてんじゃん。何してたの、マジで。

「バカっ！！」

一瞬、女の子の下着姿を目撃したような気がしたんだけど、直
後に飛んできたゲンコツでその記憶も曖昧に。

……要するに、その娘のパンチで俺は気絶しちゃいましたとさ。

水色のロングヘアに青い目。薄い唇にプロポーションばっちりな体。

服はメイド服にフリフリのカチューシャ。

まあ、彼女の姿を見れば、いわゆる美少女ってやつなんだろうけど、一応犯罪者だよな……？　ここ、日本。人の家勝手に入ったら捕まる。おーけー？

当の本人はと言えば、俺の買ってきた夕飯のパンを、当然の如く喰ってやがる。

「コホン、で、君は誰？　何してんの？　つーか人殴っという何？　強盗？」

「だ〜か〜ら〜、宇宙人。人の下着姿見て気絶するような変態には興味ありません。宇宙人、未来人、超能力者だったらアタシと会話しなさい。以上っ！」

「お前はハ　ヒか。……それに気絶したのはお前のパンチのせいだ
！！」

「あら、今のネタが分かるって、あんたオタクなの？ キモいから話しかけないで。それにアタシのパンツのせいで気絶したなんて……」

「パンツじゃないっつもの！ パンチだよ、パンチ。ゲンコツだよ、お前の……！」

「パンツパンツ連呼しないでくれる？ 変態」

「違っつ！ お前のパンチじゃなくてパンツが、あれ？ お前のパンツ、じゃなくて……」

「アンタをこれから『下着（性）フェチ男（名前）』って呼ぶことにするわ」

「……………」

自称宇宙人は、俺の夕飯をことごとく食い尽くすと、今度はテレビを点けてくつろぎ始めた。

「出てけっ！ もう十分飯喰っただろ、本当に警察呼ぶぞ……！」

「うるさいフェチ男。警察でも軍隊でも呼べば良いじゃない。そんなの、アタシの小指で一瞬で消し炭になるわよ」

「この厨二病女がっ……！ よろしい、ならば戦争だ……」

警察の人が来て事情聴取。……と思つたら奴がない。どこへ行った？

クソっ！ 逃げられたか？ いや、玄関は閉まっていたし、まだ家の中にいるはずだ！

警察官と一緒に、家の中を探し回る。

俺の家は綺麗だけど狭い一軒家、見つからないはずが無い。

2分ほど探すと、トイレの中からわざとらしいうめき声が聞こえた。

警察官は訝しげな顔をしている。まずい、上手く説明しないと……！

「こちらに犯人がいるのですか？」

「はい、留守中に入って来た少女なのですが、僕を殴りつけて気絶させた上、金品を奪っていきました」

ふふっ、どうだ厨二病女、ちょっと大げさに言っただぜ！

「少女……？ それほど危険な人物がいるのに、通報した間、貴方は逃げなかったのですか？」

「はい、その、犯人を興奮させると危険だと思いましたので」

「分かりました、少し交渉してみましよう」

「」で、トイレの中からとんでもない発言が聞こえて来た。

「お、お兄ちゃん……また警察の人呼んで悪戯したの……？」

意味不明。全く持って意味不明。何をのたまうこの女。

「誰が『お兄ちゃん』だ！ 出て来い！！ 初対面だろ、お前！！」

「もう、また迷惑かけて……お兄ちゃん、もうやめなよ。警察の方も帰って大丈夫ですよ？ すみません、アタシがトイレにいなければお兄ちゃんを止められたのですが……」

「~~~~~っ！！」

怒りのあまり、声にならない俺。何という言い掛かり・オブ・言い掛かり。今話題の某国船長もビックリだ。

「これは一体……？」

「まずい、警察官が面倒くさそうにし始めた！ ま、まずい、何とか引き止めないと……！！」

「あの、これは……」

「悪戯は困ります、本官は帰らせて頂きますね」

……俺、敗北。

「いや、上手く行くもんだね。どうだフェチ男、アタシのスーパー超絶美麗にして可憐な演技は！ 参ったか！！」

「……いろんな意味で参ったよ」

「よし、じゃ、アタシ今日からここに住むから」

「お前は一度、自分の道徳心を疑った方が良いで。多分」

「宇宙人だから大丈夫だ、問題ない」

ちよくちよくネタを挟んで来るな、こいつ……

「……家族が駄目って言うに決まってんだろ？」

俺がそう言うと、コスプレ女はニヤツと笑って答えた。

「佐渡主人^{さつごもひり}17歳。都会に憧れて上京。ゆえに両親とは別居、仕送り生活。バイトは新聞配達とコンビニ。朝が早いので授業中よく寝る。身長約170cm。彼女は当然人生で一度もない。性癖の詳細は……」

「やめるおおおおお!!」

「これなら泊めるかな?……かな?」

「だが断るっ! 誰が泊めるか、こうなりゃ力尽くだ!! 出てけ!!」

俺はコスプレ女の腕を掴み、玄関まで引っ張って行こうとした。

「痛たたつ！ 何すんのよ!!」

「大丈夫だ、問題ない。お前を家から追放するだけだ」

俺が彼女の腕を放そうとした瞬間……

『びりり!!』

えくと、布の裂ける大きな音がしました。

まあ、アレですよ。メイド服が裂けた音ですよ、ははっ……。

見上げればほら、鬼の形相をした女の子がいる訳で。

俺は生命の危機を感じているわけです。ああ、武術でもやっておけばよかった

「てんめえええええええええええええええええつ!!」

「ぎゃああああああああつ!!」

俺の股間に彼女の蹴りがクリーンヒット。

俺、気絶。 @本日二回目。

俺が目を覚ますと、何やらコスプレ女は頭を抱えて唸っている。
やれ、『あゝお終いだ』だの『イヤだこんな奴と、もういつ
そ死ぬか』だの……。

俺は股間の鈍痛を堪えながら、彼女に向かって問いかける。

「一体どうしたんだ、今日は泊めてやるからさ、もう良いだろ？」

「そ、それどころじゃないわ！ アタシは……あなたのせいでもう
お終いよー!!」

どっちかって言うと俺の生活の方がお終いなんだが……まあいい。

「あなた……うう、これを見なさい」

彼女から渡された手鏡を覗くと……

「な、なんじゃこりゃあああああああー!!」

鏡に映るは犬の耳が生えている俺の姿。触つてみると、ふっさふっさである。柴犬の如くふっさふっさなのである。……めっちゃ気持ち良い。

え？ 夢？ 夢なら覚めて……。

「う~~~~う~~~~ あんまりだ…… H E E E Y Y Y Y あアアあんまりだアアア A H Y Y Y A H Y Y Y A H Y W H O O O O O O O H H H H H H H H H H ! ! おおおおおれエエエエエのオオオオオオ耳イイイイイイがアアアアア~~~~!!」

「言ったでしょ？ 宇宙人だって。残念だけど、さっきアタシがあんたの股間を蹴ったから、契約しちゃったってわけ。『奴隷いぬとご主人様の関係』のね…… ああもう鬱だ、死のう……」

「ふざけんな、何だよこの耳!? お前が死ぬのは勝手だが、その代わり他所よそでやれ。俺は樹海を推奨する!!!」

俺がパニックって暴言を吐いたとき、既にコスプレ女はカーテンレールに電気コードを掛け始めた。

この行動の意味する事は……

「良いのね？ 分かったわ……。ちなみにアタシが死んだら、契約

第2話 転校生はクラスメイド！？

「と言うわけで、今日から2年1組に転入する麻素戸^{まぞと}レイさんです。じゃあ麻素戸さん、自己紹介を……」

「麻素戸レイです。趣味はガーデニング、好きな食べ物は紅茶とケーキ、日本に来るまではフランスで暮らしていました。今は佐渡君の家で居候させてもらってます。みんな、仲良くしてくださいねっ

」

どうしてこうなった……。

イヤ耳を帽子で隠しながら、俺は心の中で呟いた。

事の発端は昨日に遡る。

メイドの自殺を何とか食い止めた俺。

自分の頭のふっさふっさの耳を触っては落胆する。

「なあ、これなんかトリックじゃないの？ ドッキリとかじゃないの？ マジなの？ 死ぬの？」

「がっかりしてんのはこっちよ！ こんな『人間』と契約を結ばなくちゃならないなんて……」

「ほんと、どういう事なの……。ビリー兄貴もびっくりだぜ、歪みねえな」

「うるさい、それ以上言うとまたタマ蹴りつぶすわよっ！」

「はいい！？ ……ビクンビクンッ！」

な、何故だ！？ 体がゾクゾクしてしまっ……。

「ああ、ちなみにあんだドM体質になったから」

「ハア！？ 何だその設定っ！ ふざけんなよ！！」

俺がそう言い終える前に、俺の手のひらに肉球が生えた。……『ポント』って擬音が出そうな感じで。

耳はふっさふさ、手のひらはプニプニである。もうやだ、この体……。

「え〜と、これはどういっ事……？」

俺が不安そうな目で聞くと、メイドはニヤアツとドS全開な眼で俺を見た。

「^{アタシ}ご主人様の命令を無視すると、奴隷であるあんたの体はどんどん犬に近付いていくわ。敬語を使わないのは勝手だけど、犬になっても知らないわよ？ ……ま、アタシはそれでも構わないけど。敬語の選択はどうぞご自由に」

「エエエエエエ（・、）エエエエエエ」

……orz。今の俺の状況に、これほどびつたりな^{アスキーアート}AAもなかるう。

もうだめば、何だよこの超展開……。

一通り絶望し直し、夕飯を食べて心を落ち着かせることにする。
レイはと言えば、勝手に湯を張って、風呂に入っさっぱりして

やがる。ここ、俺の家だよな？ だんだん感覚が狂ってきたぞ、アハハ……。

お風呂上がりのメイドさん。デリカシーが無いのか日常的にそんなのか、バスタオル一枚でぶらついてやがる。

下着姿見ただけで殴りやがったくせに……。

「下着フェチ男、勝手に洗濯カゴの下着とか漁ってないでしょうねっ！」

「知るく……知りませんよ。大体そんな趣味無いです。貴女の下着漁るんだったら、ゴミ捨て場の空き缶漁ってる方がマシです」

「てめえ……」

もう、半ばヤケクソだ。犬にでも何にでもなっけてやるよ、ふんっ！ ……いや、犬にはなりたくないけど、やっぱり。

「そう言えば、名前聞いてなかつ……いませんでしたね、何て言うんでしょうか？」

「麻素戸^{まそと}レイ。……ま、本当の名前は教えられないわ。この地球^{ほし}の言語では発音出来ないし」

「りょくかいです、レイさん。……で、俺はどうすりゃ良いんだ……ですか？ 宇宙人でも攻めて来るのですか？」

「何か腹立つ言い方ね……。まあ良いわ、奴隷の調教をするのはこれからとして。大事な話だからよく聴きなさい」

「一番いいのを頼むっ！」^{説明}

人間代表男子高校生と宇宙人代表メイドのサミット、ここに開催

「あんたは人間」

「大丈夫だ、問題ない」

「アタシは宇宙人。あんた、佐渡主人と契約を結んだ」

「百歩譲って大丈夫だ、問題ない」

「じゃあ次。あんたが厨二病過ぎるのを発見したアタシの父、宇宙人の王が、『厨二病なら、宇宙人とか魔法とかにすぐ馴染めるんじゃない？ 戦争の兵は多いほうが良いし』とアタシを遣わしました」

「大丈夫じゃない、問題だ」

「おかしいな。俺が犬になるとかどうこうじゃなくて、規模が宇宙戦争クラスになって来たぞ……？」

「あんたはこの惑星を支配し、宇宙戦争の拠点にするのよ！ さあ、がんばれフェチ男っ！！ 成功した暁には、アタシのパンツやブラを好きなだけクンカクンカスーハースーハーさせてあげるわ！」

「Fuck！！ レイさん、貴女には本気で殺意が芽生エマ〜シタヨ〜！（外国人風に）」

殺意と同時に尻尾も生えた。『ポンツ』

……ドンマイ俺。

「んじゃ、詳しい事は明日話すとするわ。学校でね」

「待てええええ！ まだ意味が分からないぞおおおおおっ！！！」

……寝やがった。しかも俺の布団を敷いて。

ふざけんな、俺は厨二病じゃねえっ！ ちょっと空を見て思いを馳せてみたり、『未来』を『明日』って読んだりするだけだっ！！！
厨二病だとか催眠術だとかそんなチャチな物じゃあ断じてねえ、もつと素晴らしい物の片鱗を感じたぜ……。

……え、このメイド、学校？ 学校で話そうって言った？ まさかね……。

……で、今に至る。

「よし、佐渡君の席の隣が空いてますね。麻素戸さんは今日からその席です。先生はこれから出張なので、一時限目のホームルームは自習です。課題を提出したら、後は自習していて下さい」

うわ、ベタにベタを重ねたようなベタだよ！ちなみに俺の席は最後列一番左。でもって空いていた右の席に宇宙人メイドが入るって寸法だ。

宇宙人は周りからの質問責めに笑顔で答えている。まるで芸能人が大統領のようなお澄まし顔と来た。ふざけんな、俺に対しては敬語なんて使わねえじゃね〜か！

俺が溜め息をついていると、前の席の男がいきなり俺の胸ぐらを掴んできた。

「佐渡、テメエ……。そんな可愛い娘ともうお泊りかあ？ 疑心暗鬼になっちまうぜ俺様はよお……。疑心暗鬼、略してギシアン？つてなあ」

「うるせえカケル、そんなんじゃないんだよ」

前の席の手城翔は、一応俺の親友って部類に含まれる。てじろかけろ

金髪オールバックの髪型、身長180cm以上あるゴツイやつで、目付きもイッチャツてる上、口も悪いと、正に悪のロイヤルストレートフラッシュのようだが、実はもの凄い真面目な奴である。

最後の一枚、スペードのエースがクローバーのエースだった感じか。……ストレートフラッシュ！

「そんなんじゃないやねえならなんなんだよ!? 髪は青くてヤンキーかと思ったら、めちゃくちゃ可愛いじゃねえか! 萌え萌えキュンッ! じゃねえかよ~~~~マジム力つくぜえ~~~~ッ!」

コイツ、手城翔はもう一つ大きな特徴があった。

『オタク』だ。……それも、その辺のオタクとは格が違う。

夏冬の祭典には泊り込みで一番乗り。アニメDVDや漫画、ゲームは鑑賞用と保存用の二つを購入。セリフや声優まで片っ端から覚えてる。……その才能を少しで良いから勉強で生かせよ。まあ、真面目なコイツは勉強も出来てしまったりするんだが。

彼は不良から巻き上げた金で新品のアニメDVDを揃えてしまっ、残念なケンカ番長さんでもある。

人は呼ぶ。彼を『闘うオタク』と……。

「オイ、よそ見してんじやねえぞお！」

カケルは冗談半分に手をあげて殴るふりをした、と同時に俺の目の前から『消え』た。

ガシャアアーーーーンツ！！

後ろのロッカーに頭を突っ込んで伸びているカケル。俺には一瞬、何が起こったのかわからなかった。

まあ、すぐ右隣を見たよ。悪い事は全てこいつを疑っておけば、とりあえずOKだろうってね。

「誰だかわからないけど、アタシの犬テッペに手を出さないでくれる……？」

麻素戸レイさんは、こうして転校初日からお尋ね者になってしまいましたとさ

(つづく)

第3話 のじゃロリ少女、サトリの襲撃！

……前言撤回だ。レイさんは『正式に』お尋ね者になんてならなかった。

「先生……いつまで俺は反省文を書けばよいのでしょうか……」

「だって、麻素戸さんが君に命令されて、仕方なく手城君を殴ったって言うから」

「信じるんですか！？ それー！」

「だって、君はそれを認めたじゃないか」

「……」

「ごもつともだ。下手にご主人様のご機嫌を損ねたら、俺は犬になるんだ。耳からして多分柴犬。」

「選んでなんかいられない。行くも地獄、返すも地獄だねっ」

「……で、問題を起こした本人はと言えば「キヤー、格闘技とかやってたのー？ かつこいいねー！！」だの「手城ってマジキモいから、麻素戸さんがぶっ飛ばしてくれてスカッとしたよ！」だのまあ凄じ持てはやされっぶりだ。」

「可愛ければなんでも許されるのか、恐い世の中だぜ……。」

（それに比べて、なんの脈絡も無くぶん殴られて病院行きの手城）

しかもクラスメイトからの陰口付き)、哀れすぎる。

「麻素戸さんって、佐渡君の家に居候してるってホント？ あんな暴力させるような人と一緒にいて大丈夫？ お風呂とか夜とか襲われない？」

……俺は発情期の猿か。

「心配だよね。だって佐渡君って地味だし何考えてるのかわかんないよ？ ほら、だってあの手城とも友達なんだし。盗撮用のカメラとか気をつけてね！」

驚いた。俺の親友は、顔面骨折してもクラスメイト一人にすら同情してもらえないらしい。

しかもクラスでの俺は、『地味で何考えてるのか分からない根暗な盗撮魔』という位置付けだったらしいな、これは感情の起伏の少ない人種の俺でも結構へこむぞ、うん……。

で、人間に混じっている宇宙人が一言。

「そんなことないよ、佐渡君ってすっごく良い人だよ！（迫真の笑顔）」

ドンッ！！

俺は、あまりの苛立ちに机を叩いた。

ま、当然冷たい視線が集まるわけで。「やっぱりあぶねーやつ」とか「麻素戸さんをみんなで守ろう」とか変なことでクラスの団結が強まった。

……これ、下手な学級委員よりまとめるの上手くね？とか思っ
て自分をそつと慰めた。

それから数時間、ひとり言を言いながら貧乏ゆすりする少年（負のオーラ）と、腹立たしいほどに明るい美少女の笑顔が教室中にふりまかれていましたとさ。

「キーン、コーン、カーン、コーン」

間の抜けた音でチャイムが鳴り響く。今日の授業はこれで終わ
りだ。

ギャラリーの目をすり抜け昇降口へと急ぐ。
あんなキチガイ宇宙人の近くにいたら、また反省文をしたための
羽目になりそうなので、逃げるように学校を後にする。
スピードワゴン……じゃない、佐渡主人はクールに去るぜ……。

「ふむ、おぬしが佐渡主人か……」

後、家まで数百メートルという所の路地裏で、何者かに呼び止め
られた。

声のする方向を見れば、赤いランドセルを背負い、ピンクのシャ
ツに赤いチェックのスカートという姿の女の子が、塀の上にちょこ
んと座っている。

俺の知識では、確か『小学生』という生き物だったはずだ。無論、
俺の知っている『小学生』は、『おぬし』とか使わないんだが……
すまない、私には興味がないんでね（どこぞの大天使風に）。

「あの、俺に何か用かな？」

「用……か。ふむ、まあ用は無いな」

「……？ じゃあ俺は帰るよ、こんな路地裏にいと危ないから君も帰りな」

「まあ、そう急せくな。一つ質問に答えてくれるか？」

「……？？ ああ、構わないけど（変なガキだな……）」

「おぬしは、筆箱とリコーダー、どっち好きじゃ？」

「な、なんだそれ??」

「まあ、適当にでも良いから答えてくれ」

「……じゃあ、音楽の方が勉強より好きだし、リコーダーで」

「そうか……リコーダーじゃな……」

突然、少女は塀から飛び降りると、俺の前に立ちふさがった。

「な、なんだ急に……!!?」

「喜べ、小学生と間接キスして死ねるぞ……宇宙まぞとの王の娘の契約者

……」

「お前……まさか……レイの知り合いか!?!?」

「まあ、そんなところじゃ……」

背中のレストランから、まるで刀でも抜くようにリコーダーを取り出す少女。

あどけなかつた顔つきは急激に引き締まり、口元にはゆがんだ笑みをたたえている。

髪と目を見る見る間に紅く染まり、赤黒く光るその鋭い眼光は、明らかに人間の物では無くなっていた。

「今からでも選ばせてやるぞ？ 筆箱か、リコーダーか……ふふっ

……」

「あはは……ど、どっちも選ばないというのは……？」

「……だめじゃ！」

次の瞬間、恐ろしいほどのスピードで俺の口に何かかねじ込まれた。

前歯が欠け、すさまじい痛みが口全体を覆う。

「小学生のリコーダー、ちゃんと味わって死ぬんじゃぞ……？」

「うっっ……ガハッ……!!」

味ってったつて、血の味しかしねえよ!!

少女は馬乗りになって俺の首を抑えると、さらに力を込めてリコーダーを突き立てた。

リコーダーは次第にメリメリと嫌な音をたて、俺の喉を完全にふさぎに、というか突き破りにかかる。

「やめ………ろ……!!」

「やめたくても、こっちも仕事なんぞな。すぐに楽にしてやるから勘弁してくれ。それに、おぬしは犬として契約したなら『こういうこと』は気持ち良いはずじゃぞ？ ふふっ……」

俺は死ぬのか!? こんなわけの分からないことで……（しかも微妙に快感）

くそっ………これも全部あのバカのせいだ……

「だ〜れがバカですって？」

朦朧とした意識の中、あの印象的な水色の髪が風を切るのが見えた気がした。

……次の瞬間、俺の上に乗っていた少女は、弾丸のように飛び込んできた拳に吹き飛ばされ、塀に叩きつけられた。

「うちの契約者^{ペット}に手を出さないでくれる？」

見覚えのあるどや顔。俺のご主人様の登場のようだ。

「契約者と書いてペットと読むなよ！！ ……ゲホッ、ゲホッ……」

血にむせかえりながら答える俺。

紅髪の少女はあざの出来た体を引きずって起き上がろうとするが、足元がおぼつかず、再び地面に倒れこむ。

「く、これだけ念入りに襲撃しても気付かれたか……流石宇宙の王の娘じゃのう……今の一撃で星がみえたぞ……ふふふ」

「これだけのことをしたんだから、覚悟はもう出来てるのよね。そ

うでしよう？ サトリ……」

レイはすかさず「サトリ」と呼んだ紅髪の少女を押さえつけると、首に青いナイフを突き付けた。

「いやいや、わしは案外臆病でな……死ぬ覚悟は出来てなかったりするのじゃ」

「……！？」

次の瞬間、レイの押さえていたものは、ただの大きなクマのぬいぐるみに変わっていた。

「なるほどね……あの臆病なサトリが自分から姿を現すわけない……か……」

空を見上げながらそつと呟くレイさん。

なるほどって、納得したみたいですが……急に小学生に因縁つけられて殺されかけた俺には意味不明だぜ……！！

「ちよつと、話が急すぎてついていけないぞ……！ ゴホッ、ゴホッ」

「まあ、これからは気をつけなさいってこと。言ったでしょう？」

これは『戦争』だって……」

ああ、なるほどな。戦争なら仕方ない。
俺は悠長に戦場で散歩したり寝転んでたってわけか、そりゃー俺
の責任だ。

……って聞いてねーよおおおおお!!!(怒&泣)

(くじく)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7593o/>

クラスメイドッ！～ドSメイドとイヌ耳生えた俺。～

2011年11月16日12時13分発行